平成28年度　富里歴史講座　　於：富里市立図書館　　２０１７・３・５

末廣農場の畜産業

～古写真に見る末廣農場の姿～

林　田　利　之

１．岩﨑正彌による農場経営

明治 20 年、明治政府の土地払下げによって岩﨑彌之助は富里獅子穴の地に 343 町歩の土地を購入し、明治 22 年には甥である久彌によって植林事業が開始されます。こうして、22 年間植林地とされた土地は、明治 44 年に久彌の実弟である正彌がアメリカモルガン大学を卒業して帰国したのに際し、翌大正元年 11 月１日（**図１**）、正彌のために養鶏と養豚の事業を開始させます。この時、農場名には「末廣の野原」の名前が採用され、ここに「末廣農場」が誕生することとなります。

正彌が導入した洋式の養鶏法では、鶏を養鶏舎に閉じ込めて栄養価の高い餌を与えるという方法が採用され、箸で千切れるくらいの柔らかな肉を生産することに成功します。

これらの肉は宮内省、大使館、帝国ホテル、料亭末廣などに卸され一般市場に出回ることはありませんでしたが、唯一、料亭末廣では鶏の刺身を作って出していたこともあり、食通の間では好評を博していたようです。しかし、生産コストの高い高級品であったため、生産すればするほど赤字となる商品であったことから、営利事業としては失敗に終わりました。

それ以外では農場事業は順調に進みましたが、大正４年、正彌が東京の工業会社に異動となったことを機に末廣農場の活動は休止状態となり、大正８年から久彌自らが経営に携わって行くことになります。

また、末廣農場の実態については伝聞によるものが殆どでしたが、久彌が経営に携わる以前から末廣農場の誕生と終焉を見守った橘常喜氏（**図２**）のもとには、氏の残された写真や手紙類があり、今日、我々に末廣農場の姿を伝えてくれています。

図１　大正元年 11 月１日第一回記念祭

図２　橘農場長

２．久彌による末廣農場の経営

久彌による農場経営は、事業経営そのものを東山農事会社に委託し、自らは事業運営と技術面について指揮をとりました。また、久彌は畜産農耕の改良に関する多くの資料を作り、自己利益的な農業と畜産を実施するばかりではなく、逐次これを各方面の研究会などで発表し、提供しました。久彌は農場長であった橘常喜（**図３**）に対して、**「採算を度外視して、わが国畜産界の改良進歩のためになるような模範的な実験農場を作るように」**と指示しました。

図３　末廣農場内で馬車に乗る久彌と橘農場長

その結果、末廣農場は日本農畜産業研究に多くの功績を残すことになります。

３．甦る末廣農場の姿

これまで末廣農場の姿を伝える資料は極限られたものであり、昭和５７年に刊行された『富里村史』、東山農事が作成した冊子『東山事業』、『岩﨑久彌伝』の中に掲載された写真などが唯一のものでした。農場で行われていた各種の事業については『岩﨑久彌伝』で詳しく述べられていますが、これまで、それを裏付ける写真資料などは見つかっていませんでした。

平成 20 年から開始した末廣農場に関する調査によって、橘常喜氏のご家族に巡り合えたことから、これまで一般に公開されたことのない末廣農場関係の写真資料などの発見につながりました。

今回は、大切に保管されていた写真資料の一部（農場関係）について、ご家族のご厚意によって公開させていただくことが可能となったものです。農場で行われていた事業の内容を確認しながら、写真資料を見て行きたいと思います。

【養　鶏】（図４～13）

養鶏は最高時に8000羽が飼育されており、その産卵数は年間45万個にものぼりました。また、年間 300 個以上産卵することのできる優秀な成鶏は 50 羽以上に及びました（当時の世界記録は青森種鶏場の 361 個）。

飼育法に関しても飼料、有害菌、寄生虫などの研究が実施され、この中には学会未知の発見も含まれました。特に久彌が実施した「系統繁殖法」は各種鶏を交配してその産卵数量を調査するというもので、2500 羽の鶏を５代にわたって完全な記録を残しました。欧米においても同様な系統的調査が実施された記録が残されてはいますが、150 羽程度の記録であり、久彌の実施した系統記録は正にギネスにも認定されるような世界記録だったのです。

久彌は生産能力の高い鶏をすべて把握しており、一目でそれらの鶏の状態を見抜いては、場員達に適切な措置をとるよう指示していたと言われています。彼等は陰で「われわれの技師長」と呼んでいたそうです。